

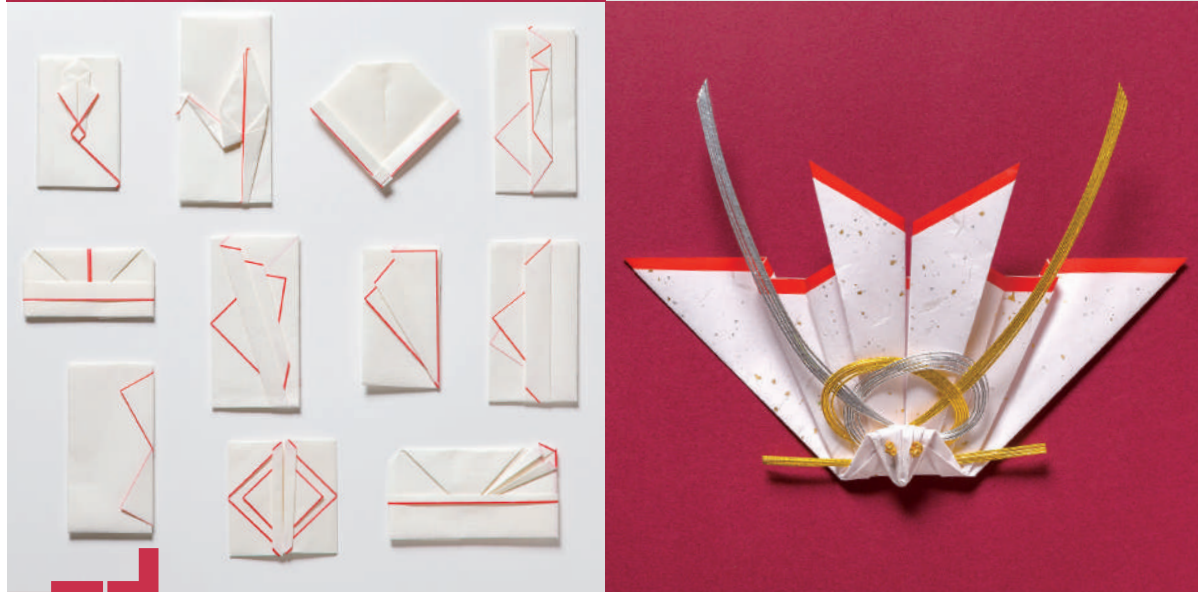
ルテ木の庭  
HOTEL NIWA TOKYO

Discover  
the latest  
Japanese landscape

# HACO \* NIWA

日本と庭のホテル 東京を楽しむはこにわ

2019 Spring vol.20



かつては一子相伝・門外不出のもので、主に口承されてきた武士の礼法が、諸大名はもとより、一般女性の教養にまで広まったのは、製紙や印刷の技術が発達した江戸中期以降、女性を対象とした仮名書きの書物が多く出版され、当時の女性の教養書(女訓書)には、様々な折形の見本図が描かれています。これら女性のたしなみとされた折形は、江戸から昭和初期まで、女子教育の一つとして継承されてきました。

贈答包みの習慣として現代に受け継がれている折形の最も身近なものといえば、「のし包み」ではないでしょうか。祝儀袋などの右上に付いた、小さな紙包みの中の黄色い部分を「のし」といい、以前は鮑の身を薄く伸ばして干したものが使われていました。生命力があり、保存も利く鮑は、古くから縁起物や高級品として重宝されていたのです。「最高の贈り物」を象徴する意味が転じ、今では紙で作ったものや、印刷したものが使われます。他にも、婚礼の杯事でお馴染みの「雄蝶雌蝶」や、祝い膳に用いられる箸包みなど、私達が折形と触れる機会は意外にも少なくありません。

400種以上があるという折形には、「慶事は右開き、水引の色は赤白なら白が左(上位)にくる」などの決まり事もあります。本来、紙質や形・色などから内容や意味・重要度・贈り主の気持ちまでも表したという折形。「贈る人の気持ちを届け、また受け取る側も、その場で開けずに贈ってくれた人の気持ちを推し量ろうとする——折形には、日本人ならではの奥ゆかしさが表れています」と、折形研究者の有馬霞水先生は語ります。

庭のホテルでは、奥深い折形の世界へと誘う「江戸折形教室」を開催予定です。詳細は本紙最終ページ「イベント」欄にてお確かめください。

礼を尽くし、こころを包む

# 江戸折形

Traditional Paper Wrapping 'Edo-Orikata'

折形とは、人に金品を贈る際、その中身や目的などによって包む紙や折り方を変える方式のことで、そのルーツは武士の礼法といわれています。相手を敬い、思いやる心を表す折形は、日本人の清廉な精神性が育んだ、この国独特の大切な文化です。心豊かに暮らすためのヒントが詰まった折形の世界を、一緒に覗いてみましょう。



①ふだんの生活にも気軽に取り入れられそうな「菓子包み」。重ねる色の組み合わせなどを変えて楽しむことができる。②折形を使った「箱包み」の例。かつては、格式に応じて折りひだや水引の数を変えていた。③六歌仙の歌と共に、「香包み」や「木の花包み」などの見本図が掲載された「女万葉福寿海」(1783(天明3)年刊行)。こうした女訓書には、女性の心構えや諸芸、言葉遣いなどが記されており、戦前の頃まで女子教育の場で活用された。④「女有職学文庫」(1866(慶応2)年刊行)に掲載されている、折形を楽しむ女性たちの図。